

— 所沢飛行場ものがたり —

フランス航空教育団来日



来日した航空教育団一行。前列向かって右から三番目がフォール大佐

第一次世界大戦は飛行機とその関連技術の急速な進歩をもたらしました。特にフランスの航空技術は世界一とまでいわれていました。大正7(1918)年、陸軍は航空兵力増強を図るため飛行機と関連機材の購入をフランスに打診します。フランス政府は第一次世界大戦の戦局と戦後の影響力を睨んで同盟国であった日本からの要請を受けることとし、飛行機と関連機材の調達に伝えるだけでなく、さらにフォール大佐を団長とする航空教育団をフランス政府の費用負担で日本に派遣することになりました。大正8(1919)年1月から15ヶ月の間、航空先進国であったフランスからフォール大佐をはじめ60余名の教官・パイロット・技術者らが来日し最新の航空技術について指導することで日本の航空の進歩発展に大きく貢献しました。

第一陣のフォール大佐以下41名は大正8(1919)年1月20日に所沢飛行場を訪問し大歓迎を受けています。所沢小学校の児童が飛行機新道から正門まで整列。フランス側将校は自動車にて、准士官、下士官は徒歩にて飛行場に向かい、埼玉県主催の盛大な歓迎会には、フランス大使代理、栗田第14師団長、貴衆両議員、陸海軍飛行将校、埼玉県内の重鎮ら400名が出席しました。同年2月4日、ベルヌ工兵少佐以下将校5名、准士官7名、下士官7名が所沢飛行場内の官舎に移住し、気球術の伝習やニューポール24C1練習機の製作について指導しました。フォール大佐をはじめ教育団員は所沢に滞在中、西洋料理店の美好軒の料理を好み楽しんだそうです。教育団による指導は9月中旬に全て終わり、団員の大部分は10月中旬に横浜港から帰国しましたが、陸軍はフォール大佐他数名の士官を傭聘(ようへい)し、陸軍航空学校、補給部支部、熱田陸軍兵器製造所での指導継続を要請しました。

所沢をはじめとする各地において、教育団は第一次世界大戦の戦訓を盛り込んだ最先端の訓練を実施し、またフォール大佐は航空中央機構の編成・組織及び航空用法についても勧告をのこしています。これらはその後の陸軍航空の成立において多大な影響を与えました。これらの功績を記念して所沢陸軍飛行学校は、昭和3(1928)年にフォール大佐(帰国後、少将に昇進)の胸像を校内に建立しています。



所沢でのフランス教育団の歓迎の宴



訓練中の教育団と実習用にフランスから購入したスパッド機



来日中のフォール大佐



この像は太平洋戦争中供出され、台座だけ残ったが昭和57(1982)年に関係者の努力によって原型を元に復元された。